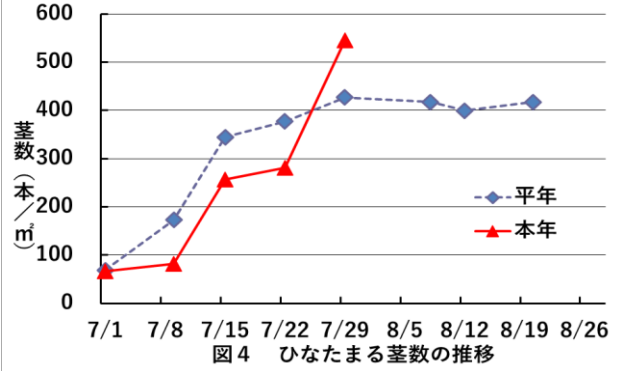
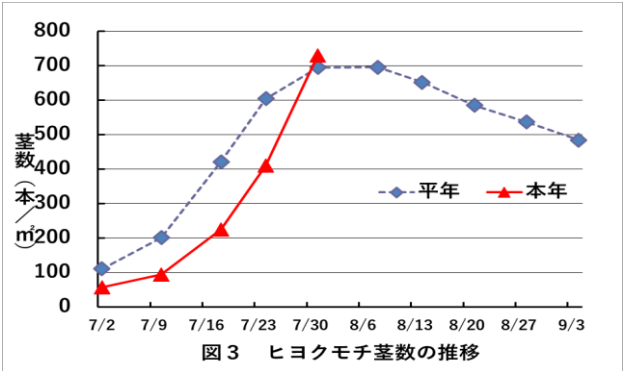
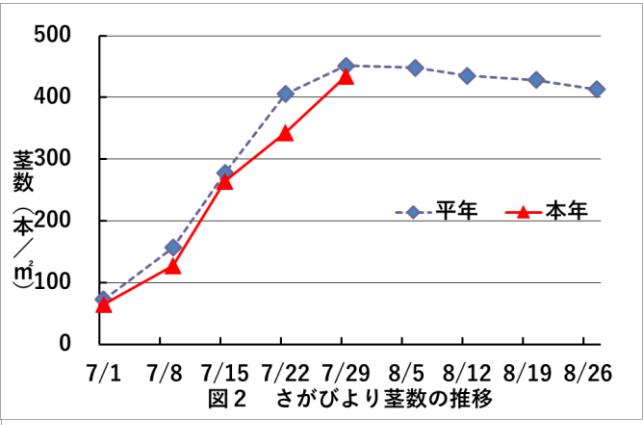
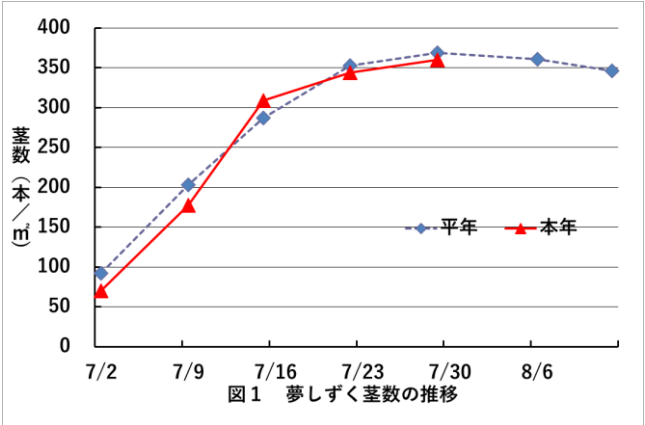


稲・大豆作情報（NO. 5）

1. 水稻作況情報田の生育概況（7月29日現在）

品 種 場 所	移植日 栽植株数	年 次	現在の生育状況				概況
			草 丈 c m	茎 数 本／㎡	葉 齢	SPAD	
夢しずく 佐賀市本庄町	6/16 18.7株/㎡	本 年 平 年 年 比	72.8 77.4 (94)	360 369 (98)	11.4 11.8 (-0.4)	38.5 39.5 (-1.0)	7月8日の梅雨明け以降、平年より高温・多照で経過している。 ○草丈は「夢しずく」「さがびより」「ヒヨクモチ」では平年より高く、「ひなたまる」で平年並み。 ○茎数は「夢しずく」「さがびより」は平年よりやや少なく、「ヒヨクモチ」「ひなたまる」で平年より多い。
さがびより 小城市芦刈町	6/20 19.6株/㎡	本 年 平 年 年 比	53.1 63.7 (83)	434 451 (96)	10.8 11.5 (-0.7)	35.2 39.5 (-4.3)	○葉齢は「夢しずく」で平年よりやや少なく、「さがびより」「ひなたまる」は平年より少なく、「ヒヨクモチ」は平年並み。
ヒヨクモチ 神崎市千代田町	6/21 15.8株/㎡	本 年 平 年 年 比	48.9 56.4 (87)	729 695 (105)	11.9 12.0 (-0.1)	40.7 40.6 (+0.1)	
ひなたまる 佐賀市大和町	6/20 15.4株/㎡	本 年 昨 年 年 比	55.7 54.4 (102)	545 427 (128)	10.9 11.7 (-0.8)	39.5 40.2 (-0.7)	

注1）各品種 前作：麦 注2）施肥及び病害虫防除は地区基準に準ずる。
注3）平年値は、過去10年間（H27～R6）の平均値（さがびよりについては、R1年を除くH28年～R7年の平均値）。
注4）ヒヨクモチはR7年度から神崎町で調査。
注5）ひなたまるはR7年度から作付けのため、昨年との比較のみ。



◆農業試験研究センター米づくり情報4号 7月30日(抜粋)

移植日	項目 品種	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	葉 齢 L	葉色 SPAD	概 況 (平年または平均との比較)
6月18日	夢しずく	本 年	71.6	360	11.5	39.0	[気象] 7月23日～29日まで ◆平均気温…3.0℃高い ◆日照時間…長い(平年比163%) ◆降水量…少ない(平年比0%) [生育] ◆草丈 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」はやや低く、「ヒヨクモチ」は高い。 ◆茎数 「夢しずく」、「ヒノヒカリ」、「さがびより」は少なく、「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」は多い。 ◆葉齢 「ひなたまる」はやや少なく、「夢しずく」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」は平年並み、「ヒノヒカリ」はやや多い。 ◆葉色(SPAD 値) 「ひなたまる」、「ヒヨクモチ」はやや淡く、「夢しずく」、「ヒノヒカリ」は平年並み、「さがびより」はやや濃い。
		平 年	72.9	412	11.5	39.2	
		平年比(差)	98	87	(±0)	(-0.2)	
	ヒノヒカリ	本 年	63.6	499	12.0	39.5	
		平 年	66.6	544	11.5	40.1	
		平年比(差)	95	92	(+0.5)	(-0.6)	
6月19日	ひなたまる	本 年	64.2	504	11.7	41.4	
		平均(2か年)	66.2	394	12.1	42.1	
		平均比(差)	97	128	(-0.4)	(-0.7)	
	さがびより	本 年	62.5	470	11.7	40.6	
		平 年	63.9	539	11.6	40.0	
		平年比(差)	98	87	(+0.1)	(+0.6)	
6月19日	ヒヨクモチ	本 年	64.1	901	12.2	39.0	
		平 年	58.7	826	12.1	40.8	
		平年比(差)	109	109	(+0.1)	(-1.8)	

2. 水稻における今後の管理

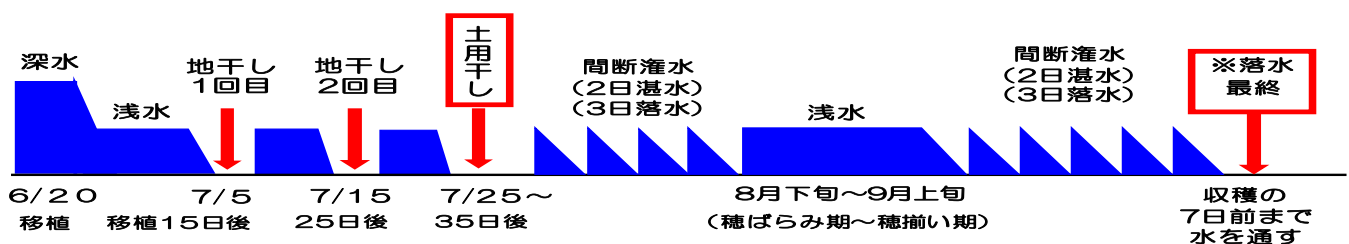
○水管理 ～ 圃場の状況に応じた水管理の徹底 ～

「夢しずく」

- ・早植えの「夢しずく」(5月下旬～6月上旬移植)は、幼穂形成期を迎えており、普通期の「夢しずく」(6月中旬移植)は、幼穂形成期を迎える。早植えの「夢しずく」は、水の要求度が高い時期のため穂揃い期まで浅水状態で湛水を保つ。
- ・普通期の「夢しずく」は中干しを終え、穂ばらみ期まで「間断冠水(2日湛水3日落水)」を実施する。その後、穂揃い期まで浅水状態で湛水を保つ。

「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」、「ヒヨクモチ」

- ・「ヒノヒカリ」「ひなたまる」は間もなく幼穂形成期を迎え、「さがびより」では、8月10日頃から幼穂形成期を迎える見込みである。
- ・1株あたり茎数が20本以上確保できた圃場は、次ページの表1を参考に「中干し」を実施する。



なお、中干しは土に軽い亀裂が入り足跡がわずかにつく程度とし、中干し後は間断灌水を行う。

- ・幼穂形成期以降は、稲が水を必要とする時期なので、「中干し」は遅くとも8月上旬までに終え、穂揃い期まで浅水で湛水状態を保つ。

※移植が遅れた圃場など、茎数が不足している圃場では、分けつ数確保のため7月下旬まで浅水管理を基本とするが、遅くとも8月5日までには中干しを終了する。

表1 品種別の中干し時期

品種	目標穂数 本/㎡	有効茎数(中干し時期)		
		50株/坪(15.2株/㎡)	60株/坪(18.2株/㎡)	70株/坪(18.2株/㎡)
夢しずく	360	24本/株	20本/株	—
コシヒカリ	370	24本/株	20本/株	—
ひなたまる	340	—	19本/株	16本/株
さがびより	370	24本/株	20本/株	—
ヒヨクモチ	440	25本/株	24本/株	—

注1) 幼穂形成期は、「ヒノヒカリ」、「ひなたまる」、「さがびより」で8月上旬頃、「ヒヨクモチ」で8月中旬頃となるため、8月上旬までには中干しを終える。

○生育状況(中干し時期の圃場の様子 ~写真を参考に中干し時期を決定する~)



○穂肥

「夢しずく」

- ・普通期の夢しずく(6月中旬移植)では、幼穂形成期を迎えている。
- ・中干しを終え、穂肥施用時は湛水し、その後地固めと根に空気を送るため、穂ばらみ期まで「間断冠水(2日湛水3日落水)」を実施する。なお、施用時期が遅れないように表2の穂肥診断基準(草丈・葉色・幼穂長の確認)に基づき、穂肥を施用する。
- ・高温が続くと、光合成で生成した澱粉の殆どを呼吸で消費し、粳への澱粉の蓄積が不足する。施用が遅れないように表2の穂肥診断基準(草丈・葉色・幼穂長)に基づき、穂肥を施用する。

表2.「夢しずく」穂肥診断基準

幼穂形成始期 の草丈	葉 色	施 用 時 期		穂肥施用量、()は山麓	
	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
73cm以下	34以下	20～22日	1 mm	2.0 (3.0)	12.5(20.0)
	34～38	18～20日	2 mm	1.5	10.0
	39以上	施用しない			
73～79cm	34～39	18～20日	2 mm	1.0 (1.5)	6.0 (10.0)
	40以上	施 用 し な い			
80cm以上	原則として施用しない				

※草丈は、幼穂の伸長程度により幼穂形成期(1mm)を基点に、前後1日あたり1cm増減する。

※出穂前15日以降の穂肥は、玄米タンパク値を上昇させるので施用しない。

※本年は例年に比べ高温乾燥状態が続いているため、表2.「夢しずく」穂肥診断基準に比べ、草丈が低く葉色の低下が目立つ圃場では、穂肥を3.0kg/10a(BB602で20kg/10a)施用を行う。

「ヒノヒカリ」

- ・「ヒノヒカリ」は、8月5～7日頃に幼穂形成期を迎え、穂肥施用時期を迎える見込みです。
- ・施用時期が遅れないように表3の穂肥診断基準（草丈・葉色・幼穂長）に基づき、穂肥を施用する。

★「ヒノヒカリ」の穂肥施用のポイント

- ①出穂前18～20日（幼穂の長さ3～5mm）に施用。
- ②草丈が80cm以上で、葉色が濃い（SPAD値40以上）場合は施用しない。
- ③草丈が80cm以下で、葉色が薄い（SPAD値34以下）場合は、2日程度早め（出穂前22～20日で幼穂長1～2mm）に施用する。

表3.「ヒノヒカリ」穂肥診断基準

幼穂形成始期の草丈	葉色	施用時期		穂肥施用量	
	葉緑素計	出穂前	幼穂長	N成分 kg/10a	BB602 kg/10a
80cm以下	34以下	20～24日	1～2mm	3.0	20.0
	34～38	18～20日	3～5mm	3.0	20.0
	38～39	16～18日	5～15mm	2.0	12.5
	40以上	—	15～30mm	—	施用しない
80cm以上	34～38	18～20日	3～5mm	2.0	12.5
	38～39	16～18日	5～15mm	1.5	10.0
	40以上	—	15～30mm	—	施用しない

※隣接圃場が「ヒヨクモチ」だと葉色が淡く見えますので留意してください。

「ひなたまる」

- ・「ひなたまる」は、8月6～8日頃頃（昨年の展示圃：8/5）に幼穂形成期を迎え、穂肥施用時期を迎える見込みです。
- ・施用時期が遅れないように下の穂肥施用のポイント（草丈・葉色・幼穂長）に基づき、穂肥を施用する。

★「ひなたまる」の穂肥施用のポイント

- ①出穂前18～20日（**幼穂の長さ5mm程度**）に施用。
- ②草丈が77cm以上で、葉色が濃い（SPAD値42以上）場合は施用しない。
- ③草丈が77cm未満で、葉色が濃い（SPAD値42以上）場合は、窒素成分で1.5kg/10a（BB602で10kg/10a）を施用する。
- ④草丈の高さに関らず、葉色が薄い（SPAD値42未満）場合は、窒素成分で3.0kg/10a（BB602で20kg/10a）を施用する。

表4.「ひなたまる」穂肥診断基準

草丈	葉色 (SPAD値)	穂肥施用量 (窒素成分/10a)
77cm以上	42 以上	施用しない
	42 未満	3kg
77cm未満	42 以上	1.5kg
	42 未満	3kg

注1) 草丈、葉色は幼穂形成始期（幼穂長1mm）の測定値。

注2) 葉色（SPAD値）はSPAD502-PLUS（コニカミノルタセンシング社製）により測定。

「ヒヨクモチ」

- ・「ヒヨクモチ」は、8月15日頃から幼穂形成期を迎える見込みですので、8月上旬には「中干し」を終え、湛水管理に移行する。なお、穂肥は表4の施肥基準を参考に施用する

表4. ヒヨクモチの穂肥施肥基準

	穂肥Ⅰ施用量(kg/10a)	穂肥Ⅱ施用(kg/10a)	実肥施用量(kg/10a)
施用時期の目安	8月15～17日頃 (幼穂形成始期 幼穂長1ミリ頃)	8月25～27日 (穂肥Ⅰの10日後)	穂揃期 (9月8日～10日頃)
LPBB804	40	—	—
BB602	25	10	10

※「元肥一発肥料」を施用した圃場で、穂肥Ⅰ～Ⅱの時期に葉緑素計（SPAD）で40を切る場合、窒素成分で2kg/10a程度（BB602 15kg/10a）施用する。大豆跡では、上記の5割未満に減肥して施用する。

○台風対策（台風の接近が懸念される場合の事前及び事後対策）

- ・台風接近時 → ①いずれの品種も、茎葉の繁茂度が高く、水分の蒸散量が著しい時期であるため、必ず深水・湛水を行う。（中干し中であっても必ず深水管理とする）
②出穂している圃場では、強風による稔実阻害（不稔、白穂などの発生）や登熟阻害（粃ズレにより病気や雑菌の感染）が懸念されるため、深水管理とし稲体の振動を少なくする。
- ・台風通過後 → ①茎葉の損傷により根の老化が進むことがあるので、台風通過後は必ず新しい水と入れ替えて、こまめに間断灌水を行い、根の機能維持・生育回復に努める。
②水田に海水流入による浸冠水や潮風害を受けた場合は、直ちに排水し真水と入れ替える。
できれば掛け流しを行って除塩するか、少なくとも2～3回は水を入れ替え、生育回復に努める。
③台風通過後は受光体制が乱れ、ウンカや白葉枯れ病等が発生しやすくなるため、トビイロウンカの発生には十分注意し、場合により薬剤防除を検討する。

○雑草防除

除草剤散布ができなかった圃場や散布が遅れた圃場、及び処理後に田面が露出した圃場、処理3日以内にオーバーフローした圃場等では、ヒエや広葉雑草が繁茂している圃場も見受けられる。放置すると薬剤による雑草防除が困難となるため、中後期除草剤との体系処理を検討する。なお、藻類や表層剥離が多発し除草効果の低下が懸念される圃場でも、雑草の発生が懸念されるため、圃場の状況を確認し、中後期除草剤との体系処理を検討する。

対象	除草剤名	使用時期	備考
ヒエ類	クリンチャー EW	移植後20日～バヱ6L 但し、収穫30日前まで	落水散布。展着剤加用。
広葉雑草	バサグラン粒剤	移植後15日～55日 但し収穫60日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。 最低3日間入落水しない。
	バサグラン液剤	移植後15日～55日 但し収穫50日前まで	高温条件下では、薬害が生じやすいのでタ方散布。
ヒエ類 および 広葉雑草	クリンチャーバス ME 液剤	移植後15日～バヱ5L 但し 収穫50日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。最低3日間入落水しない。高温条件下では、薬害が生じやすいのでタ方散布。（展着剤無加用）
	フォローアップⅠ和粒剤	移植後15日～バヱ5L（稲4 葉期以降） 但し、収穫60日前まで	湛水散布（3～5日は湛水）
	ワイドアタック SC	移植後20日～バヱ6L （稲5葉期以降） 但し、収穫30日前まで	落水～ごく浅く湛水散布。（展着剤無加用）
	ロイアント乳剤	移植後20日～バヱ5L 但し、収穫45日前まで	落水散布～ごく浅く湛水散布。

○病害虫情報（発生および防除）

- ・今後も高温が続く見込みであり、高温・少雨の条件下では害虫の発生が多くなるため、発生状況を確認し、適期防除を実施する。
- ・セジロウンカとトビイロウンカは、6月3日頃～飛来しているが、6月20日～7月6日の飛来に加え、7月16～20日頃に新たな飛来があったと考えられる。
(トビイロウンカ：7/1～7/6の飛来が全体の約8割を占める)
- ・本年は飛来が断続的に認められ、飛来量も多いため、今後の発生に十分注意する。発生状況は、田植え時期や品種及び地域によって異なるので、発生予測図（図1）を参考に、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで、幼虫ふ化揃い期の防除を実施する。
- ・コブノメイガは、6月20日頃及び6月26日頃に飛来が確認されている。
- ・地域により幼虫の食害が多いため、今後の発生に注意する。止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、発生予測図（図2）を参考に、必ず圃場ごとの発生状況を確認したうえで幼虫ふ化揃い期（発蛾最盛期の7日後）に防除を実施する
- ・今後、発生予測は随時更新されるため、防除の考え方等については、最新情報を農業技術防除センターのホームページで確認してください。

佐賀県 農業技術防除センター

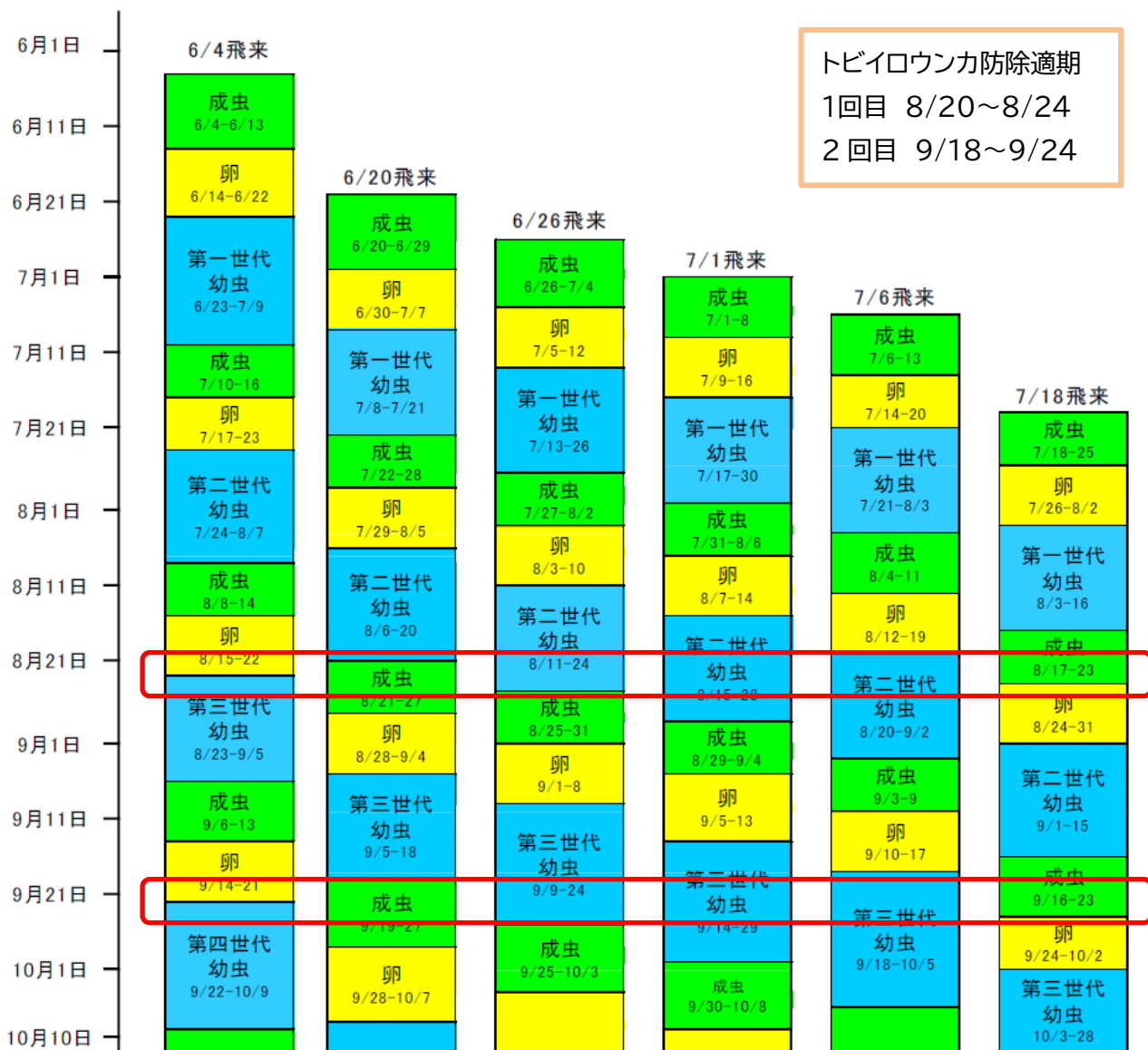


図1 トビイロウンカ各世代の発生予測（第2版、2026年7月26日作成）

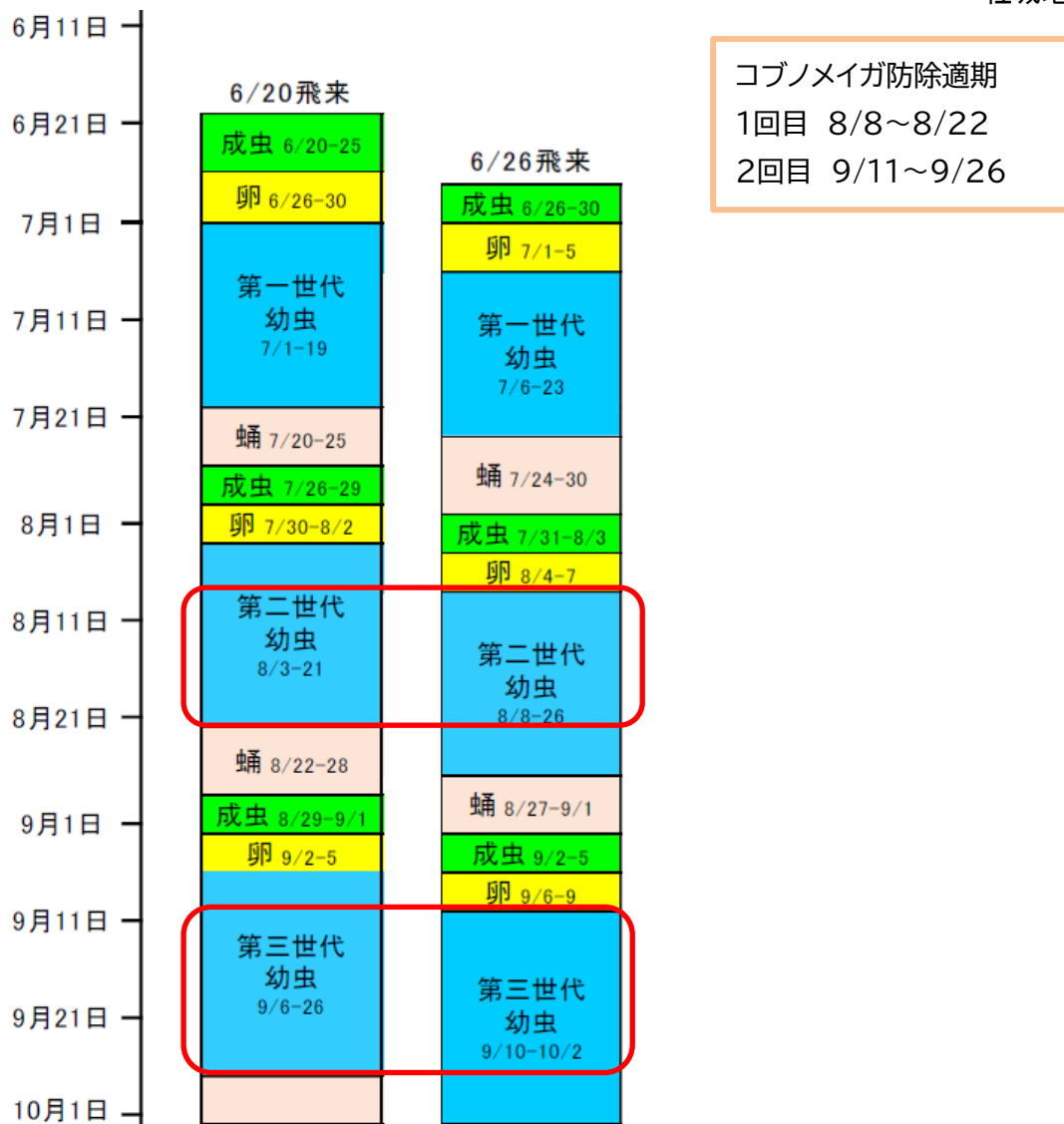


図 2 コブノメイガ各世代の発生予測（第2版、2026年7月26日作成）

【斑点米カメムシ類】

- ・今年度は斑点米カメムシ類の発生が平年より多く、R8年7月29日付けて早植え水稻及び普通期水稻を対象とした注意報第4号が発令された。また、気象予報では、8月は気温が高く、多発生条件となっている。
- ・出穂後の除草は、水田に斑点米カメムシ類を誘い込み被害に繋がるため、普通期水稻においても発生状況を十分確認し、水稻周辺の畦畔、休耕田、空き地等の除草を出穂10日前までに実施する。
- ・なお、発生が多い場合は、穂揃い期および乳熟期（穂揃い期の約10日後）の2回防除を実施する。
- ・防除はカメムシが穂に上ってくる夕方に行うと効果が高い。

表 5. 各品種別の草刈り時期の目安

品種名	出穂期（平年）	出穂 10 日前
夢しずく	8/16	～8/6 頃まで
ヒノヒカリ・ひなたまる	8/27	～8/17 頃まで
さがびより	8/30	～8/20 頃まで
ヒヨクモチ	9/10	～8/31 頃まで

※出穂期（平年）は、佐城管内における情報田のデータの平均値

◆農業技術防除センター病害虫発生予察注意報第4号 7月29日(抜粋)

1. 注意報の内容

発生地域：早植え及び普通期水稻栽培地域

発生量：平年より多い

1) イネ科雑草地での発生状況

7月15～21日に行ったイネ科雑草におけるすくい取り調査(18地点)では、クモヘリカメムシの成虫・幼虫ともに平年より多く、ホソハリカメムシの成虫は平年よりやや多く、幼虫は平年より多かった(表1)。これらは斑点米を生じやすい種であり、幼虫の発生も多いことから、今後も発生が多く推移すると考えられる。

表1 イネ科雑草における斑点米カメムシ類のすくい取り調査結果(7月後半調査)

	クモヘリカメムシ		ホソハリカメムシ		アサシカスミカメ		シホシカメムシ類		ミナミアカメムシ	イネカメムシ	
	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	成虫	幼虫
本年(R8)	15.2	11.0	2.6	1.4	0.3	0.1	8.8	6.7	0.06	0.3	0
平年比	多	多	やや多	多	並	やや少	やや少	並	並	多	並
平年	2.9	3.0	1.9	0.5	0.2	0.5	13.3	7.6	0.03	0.02	0
前年(R7)	1.7	0.6	4.1	0.1	0.1	0.6	14.2	8.6	0.2	0.2	0

注) 表中の数値は、すくい取り調査(捕虫網20回振り)における地点当たりの平均捕獲虫数。

平年値は過去10年(H28～R7)の平均値。

【イネカメムシ】

・イネカメムシは、近年全国的に被害が拡大している斑点米カメムシの一種。昨年、佐城管内においても確認されている。本種は、水稻の出穂始めに籾を吸汁して不稔にし、大きな減収被害が生じる。他の斑点米カメムシ類とは異なる特徴があり、適期の本田防除が必要となる。



イネカメムシの成虫(左)及び幼虫(右)

(防除対策)

1) 圃場内をよく観察し、本種の早期発見に努める。特に、周より出穂が極端に早い、又は遅い圃場では、本種の飛来が集中するため、発生状況を注意深く観察する。

2) 出穂前に本種の発生を認めた圃場では、通常の斑点米カメムシ

類の防除適期である穂揃い期～乳熟期の防除に加え、発生状況に応じて出穂期の防除を行う。

【紋枯病】

・8月の気象予報では、気温が高く、多発生条件となっており、一部圃場で発生を確認している。

・近年、多発傾向であり、高温多湿条件が続くと、紋枯れ病が進展する恐れが高まるので、発生を認めた圃場では病斑が上位の葉鞘に進展(垂直進展)する時期に防除を徹底する。

(液剤、粉剤の場合は出穂10～20日前を目安とする)

・病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

3.大豆における今後の管理

1 大豆の生育状況

- ・ 本年は梅雨明け後、播種作業も順調に進み、7/23現在で概ね播種作業は終了している。
- ・ 7月上旬に播種された圃場では、3～4葉期を迎えている。(写真1)
- ・ 7月下旬に播種された圃場では、初生葉～本葉の展開期を迎えている。
- ・ 播種深が浅かった圃場では、土壌の乾燥に伴い出芽に時間を要している。(写真2)



写真1 7月10日播種生育状況(7/30撮影)



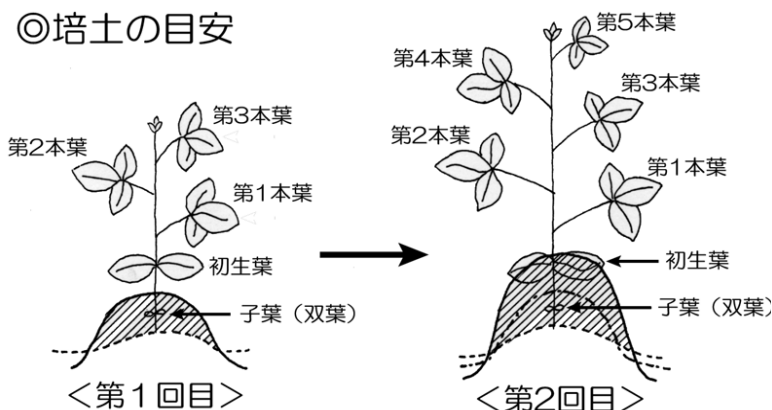
写真2 7月10日播種したが種が露出しているため発芽していない状況(7/22撮影)

2 今後の管理

1) 中耕・培土の実施

- ・ 7月上旬播種：出芽が良好であった圃場では、1回目の培土の時期を迎える。
本葉が3枚開いているのを確認したら子葉が隠れる程度まで1回目の培土を行い、本葉が5枚開いたのを確認したら、2回目の培土を初生葉(子葉の上の葉)が隠れる程度まで行う。
- ・ 7月中旬播種：出芽揃い期～初生葉展開期を迎えている。播種後7日程度経過しても、出芽していない場合は、3)の播後対策を検討する。

◎培土の目安



【高温・干ばつ時の中耕・培土の注意点】

1. 開花期近くの培土・・・×
うね間に張り出した根量が多く、大豆へのダメージが大きい。
2. 日中、高温時の作業・・・×
断根に加え、大豆の蒸散量が大きく、ダメージが大きい。
3. 株元まで土がかかっていない・・・×
培土の目的である不定根の発生、根粒菌の活性化、倒伏軽減が不十分。

2) 干ばつ対策について(降雨が見込めない状況の場合)

○高温乾燥が予測される場合の対策

- ・ コルゲート管の閉栓が土壌水分確保に有効である。

◆大豆生育期間中に必要な水量



3) 播種後対策（大豆を播種したものの、1週間程度経過しても出芽していない場合）

（1）播種後、7日程度経過した圃場では、土中の種子を掘り返し、種子の状態を確認する。

① 土中で出芽後に乾燥している場合、出芽しない可能性が高いため、再播種の必要がある。
再播種する圃場では、播種量を増やし、生育量の確保に努める。

② 播種時と変わらない種子の状態で、降雨が期待できない場合、うね間灌水（注1）を検討する。

注1：うね間灌水は、夕方、日が陰ったあとに圃場に入水し、圃場に水が行き渡ったらすぐに落水し、少なくとも翌朝には完全に落水させる。日中の灌水は、高温・多湿により種子が腐敗し易い。また、雑草の発生が多くなるため早めに除草剤散布等の雑草対策を行う。



写真3 出芽時に腐敗した大豆（過去状況）



写真4 出芽時に乾燥した大豆（過去状況）

（2）播種してから間もない圃場で、播種深度が想定より浅く種子周辺の土壌が乾燥している場合や、大豆の草冠が夜間も立っていたり、萎れ始めている圃場（写真6）では今後も高温・乾燥が予想されるため、速やかに畝間へ灌水しその後、速やかな排水を行う。

なお、平うねでの灌水は排水が遅延することから種子の腐敗を招くことが多いので、うね溝を設けるなどの事前作業を実施する。



写真5 大豆での畝間灌水の状況 (R6.8月)



写真6 乾燥により萎縮した大豆 (R7年産)

【畝間灌水のポイント】

圃場が白乾しひび割れした状態になる前に灌水を行うようにする。

(過乾燥状態になると土壌内部に亀裂が入り、畝間灌水しても圃場の先端まで水が行き渡らない。)

4) 病虫害対策について (発生及び防除)

①【ハスモンヨトウ】

- ・夏季が高温少雨で経過した年は、発生が多く増殖に伴う被害拡大が懸念されるため、フェロモントラップの捕殺数や圃場毎に白変葉の増加に注意する。
- ・播種期が早い圃場では、例年8月中旬頃からハスモンヨトウの幼虫が散見され始める。
- ・防除適期は、若令幼虫による白変葉が見られ始めた頃であり、防除が遅れ中令幼虫以上(体長約2cm以上)になると、防除効果が低下する。
- ・防除後約3日経過した後も高い密度で食害を続けている時は、再防除が必要である。
- ・ハスモンヨトウには、フェニックスフロアブル、プレバソンフロアブルは感受性が低下しており、使用を避ける。

②【オオタバコガ・ウワバ類】

- ・気象予報では高温少雨が予測され、ハスモンヨトウと同様に、多発生の条件となっている。
- ・葉に大きな穴が開いた株が目立ち、周辺に青虫がいる場合は、オオタバコガによる食害の可能性が高くウワバ類やシロイチモジヨトウが含まれる場合もある。
- ・オオタバコガやシロイチモジヨトウには、ノーモルト、トレボンは感受性が低下しており、使用を避ける



ハスモンヨトウ (①若齢幼虫の集団、②白変葉<若齢幼虫の集団による食害>、③中-老齢幼虫)
(平成22年撮影)

5) 雑草防除

(1) 難防除雑草への対応

アサガオ類やホオズキ類が圃場内に発生している場合、多発すると大豆の作付け自体が困難になるため、発生が少ないうちに、雑草の開花や結実前までの茎葉処理除草剤のスポット処理や手取りの防除に努める。既にアサガオ類が多発している圃場では、トレファノサイド乳剤の播種直前土壌混和处理（播種前に 200～300 ml/10a 散布→速やかに荒起→播種）で密度を低減できる。

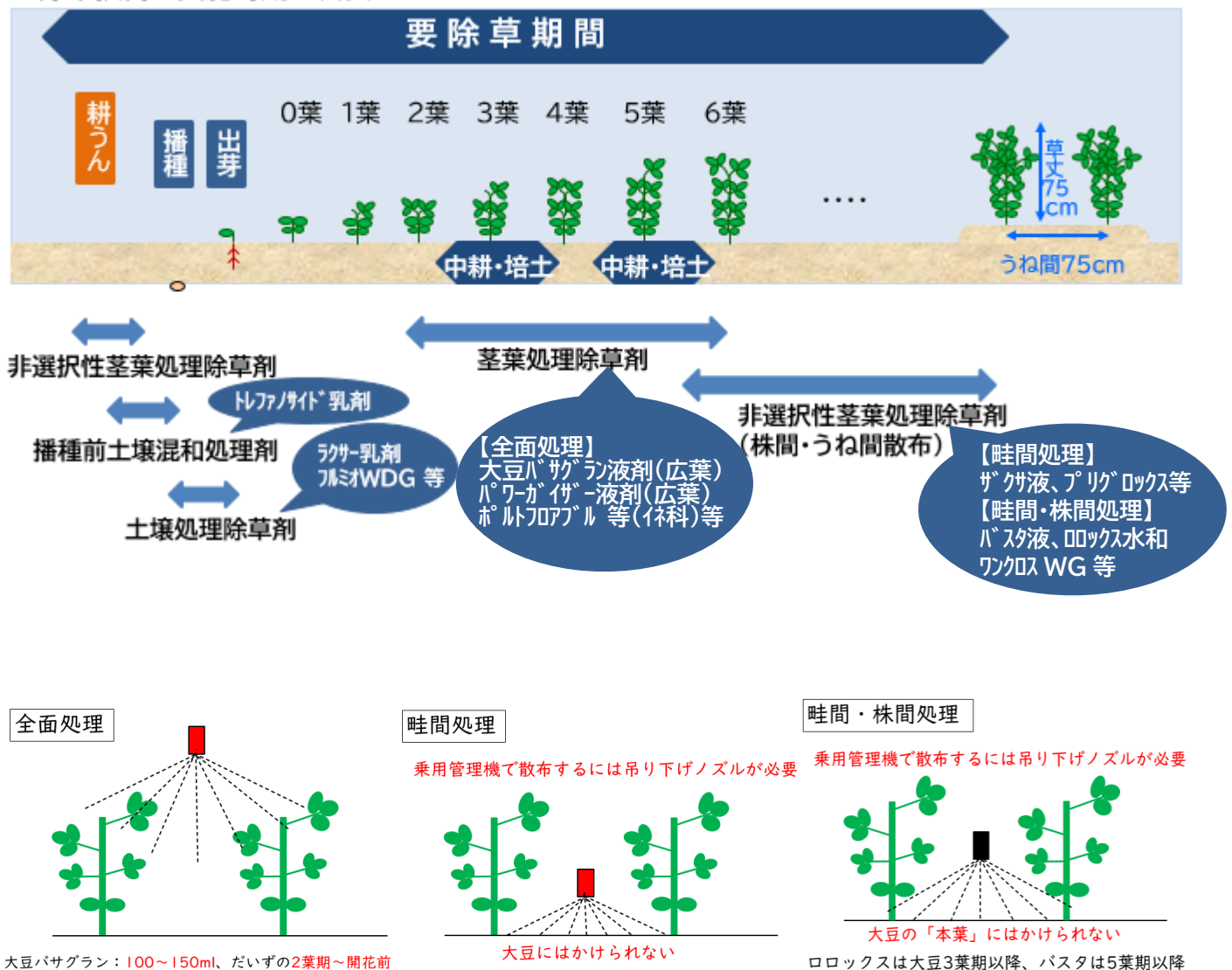
ツクサ類（近年、特にカロライナツクサが蔓延）は土壌処理剤の効果が十分ではないため、「プリグロックス L」や茎葉処理剤（大豆バサグラン等）での除草を基本とする。

(2) 中耕培土

大豆は初期生育が早く、大豆の茎葉が繁茂することで雑草発生を抑制できるので、雑草の発生が少なければ、大豆生育期（2～5 葉期）に中耕培土で防除が可能である。

※降雨等で除草剤の散布ができなかった圃場では、早めの中耕培土で雑草対策を行う。

■ 除草技術と実施時期の目安



令和8年産水稻・大豆生育期間気象グラフ（アメダス：佐賀）

佐城農業振興センター

